

【原 著】

小学校への滑らかな移行を支えるスタートカリキュラム  
共同編成プロジェクトの成果と課題

大倉 尚志 松井 紀子 伊住 継行

Bridging the Gap: Outcomes and Challenges of a Collaborative Start Curriculum  
for Seamless Transition to Elementary School

OKURA Hisashi, MATSUI Noriko, IZUMI Tsuguyuki

2025

岡山大学教師教育開発センター紀要 第15号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.15, March 2025

## 小学校への滑らかな移行を支えるスタートカリキュラム

## 共同編成プロジェクトの成果と課題

大倉 尚志※1 松井 紀子※1 伊住 継行※2

要旨 本実践では、5歳児から小学1年生の「架け橋期」の滑らかな移行に焦点を当てたスタートカリキュラム共同編成プロジェクトを立ち上げ、幼稚園と小学校の教員が集まって5回の話し合いを行った。本プロジェクトを評価するために、参加者に話し合いの振り返りを書いてもらい、その内容を検討した。成果として、①スクリーニングシートを使って、「気になる」子供を抽出し、見取りの違いを可視化することで、相互の子供観について共通理解を図ることができた。②幼稚園と小学校、双方の教員が互いの子供観・教育観の違いを理解し、歩み寄ろうとする姿勢や校種間の接続をより滑らかにしようとする意識の向上が確認された。一方、課題として、スタートカリキュラムの柔軟な運用や小学校教育における子供主体の教育の実現を妨げる教育課程の過積載状態の問題が指摘された。

キーワード: 架け橋プログラム, スタートカリキュラム, スクリーニングシート, カリキュラム・オーバーロード

※1 早島町立早島幼稚園

※2 岡山大学学術研究院教育学域

## I 問題と目的

## 1 はじめに

近年、幼稚園・保育園、小学校(以下、幼保小)の連携・接続の重要性が指摘されるようになった。特に、義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であり、「架け橋期」と呼ばれている(文部科学省, 2022)。この架け橋期の子供の学びや生活の基盤を育むことを目指すプログラムを「幼保小の架け橋プログラム」(以下、架け橋プログラム)と呼び、各地域や施設の実践が推進されている(文部科学省, 2022)。

この背景には小学校入学後に学校生活にうまく適応できない「小1プロブレム」と呼ばれる問題がある(文部科学省, 2010)。この問題の要因の一つに教員の校種による子供の捉え方の違い(中川・西山・高橋, 2011)、教師の子供への関わり方の違い(大対・梅本, 2017)が指摘されている。こうした子供観や教育観の違いもあり、幼保小が共同実施する架け橋プログラムの実践は十分な成果が上がっているとは言い難い(文部科学省, 2022)。架け橋期の教育活動を充

実することは、小学校への適応を促進し、不登校の未然防止にも繋がると思われる(中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会, 2023)。したがって、架け橋プログラムの取組みを進展・発展させる教育実践を行い、その省察を通して、よりよいプログラムにしていく必要があると考える。

## 2 研究対象学校園の特徴

A自治体の学校園は、幼稚園・保育園・小学校・中学校(以下、幼保小中)の連携を大切にして児童生徒の心身の育成に取り組んでいる。各校種の取組みを推進するにあたっては、教育委員会が中心となって幼保小中の教員がカリキュラム改善、学習支援、心身の発達に関する部会に所属し、それぞれが行っている具体的取組みを共有しながら、目指す子供像に向けて指導改善を推進している。

B幼稚園とC小学校の連携に関しては、交流活動が計画的にできるように年間計画が作成されている。例えば、幼児と1年生との交流として、なわとび・音楽発表会リハーサル見学・体験入学への参加が、幼児と5年生との交流として、合同給食が計画されている。また、教職員と幼児・児童の交流として、幼稚園教員による児童への本の読み聞かせや小学校の学校図書館司書による幼児への読み聞かせが行われている。加えて、幼稚園・保育園の幼児の交流や両施設の職員交流として、教員同士の授業参観が行われている。さらに、幼保小教員による小学校に進学した児童の情報交換会が行われている。

また、架け橋プログラムとして、幼稚園の就学前カリキュラム、小学校でのスタートカリキュラム(5週分)が2018年に作成されており、文部科学省が示している幼保小の架け橋プログラムのプロセスとしてはフェーズ3(実施・検証)の段階にあると考えられる(文部科学省, 2022)。しかしながら、第一著者が行なった小学校教員への聞き取りによれば小学校生活に適応しづらい子供も少なからずいるとのことであり、子供たちのより円滑なスタートを目指すためにも、現在作成されているカリキュラムの実施状況を評価・改善していくフェーズ4(改善・発展サイクルの定着)の段階に入ることが求められる。また、評価・改善サイクルの定着により、幼稚園と小学校(以下、幼小)、双方の教員がそれぞれの校種の特徴を共通理解し、自分たちの日々の教育・支援活動を省察することで、よりよい教育実践に繋げていくことが期待される。

そこで、子供たちの小学校生活へのよりよい適応を促すことを目的に、幼小の教員が共同で小学校のスタートカリキュラムを作成する「スタートカリキュラムの共同編成プロジェクト」(以下、プロジェクト)を立ち上げることにした。この取組みによって、①幼小の教員が幼児教育と小学校教育の相違点や共通点を相互理解する、②それによって子供が学びを深めていく環境構成の充実を図ることができる、③その結果、子供のより良い適応状況がつけられると考える。

## II 取組みの実際

### 1 取組みの概要

本プロジェクトで実施した話合いや調査の実施日、内容、参加者を表1にまとめた。＜ ＜ ＞ ＞にはその回の主な活動、「○」には実際に行ったことの見出し、「・」には活動内容を記載した。話合いは合計5回実施された。基本的な参加者は、B幼稚園4名(第一著者、第二著者、昨年度と今年度の年長担任)、C小学校6名(第一学年の学級担任4名、特別支援学級担任2名)、コーディネーター役として第三著者であった。

本プロジェクトは当初、小学校入学後のカリキュラム(1～2週間分)を共同で作成しようと検討を重ねてきたが、最終的には具体的なカリキュラム(週計画時間割)の作成には至らず、3週間分の週テーマ(ねらい)を設定するまでで終わった。

表1 プロジェクトの実際

実施日	内容	参加者
第1回 6月中旬	<p>＜架け橋プロジェクト推進計画の打合せ＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在のスタート並びにアプローチカリキュラムの確認</li> <li>・見直し、評価、改善(フェーズ4)の段階に向けての計画</li> <li>・今後の「評価、改善サイクルの定着」に向けて展望</li> <li>・プロジェクトメンバーの確認</li> </ul>	(幼)2名 第一著者 第二著者 (小)2名 校長 学年主任
7月上旬	<p>＜気になる子供のスクリーニング実施＞</p> <p>○以下の子供をスクリーニングシートで抽出</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園：就学に向けて気になっていた子供</li> <li>・小学校：小学校生活の適応上、気になった子供</li> </ul>	各校園で実施
第2回 7月中旬	<p>＜プロジェクトの必要性と推進計画の共通理解＞</p> <p>○第三著者より「架け橋プロジェクトにおける園児と児童の実態把握の意義」についての基調講話</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小1プロブレムがなぜ起こるのか</li> <li>・気になる子の実態把握から見える幼小連携の必要性</li> <li>・架け橋プロジェクトの先進事例とその課題</li> </ul> <p>○情報交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼小連携の捉え方</li> <li>・幼の10の姿と小中のつながり</li> <li>・気になる子供</li> </ul>	(幼)4名 (小)6名 (大学)1名
第3回 7月末	<p>＜幼小で「気になる」子供についての情報交換＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・捉え方にズレのある子供を中心に</li> </ul> <p>＜幼稚園の遊びを用いた学びの意図と小中へのつ</p>	(幼)4名 (小)6名 (大学)1名

	<p><u>ながり理解</u>&gt;</p> <p>○幼小接続に関する幼稚園からのプレゼンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊び込む子供の姿（写真）を「育てたい10の姿」と照らし合わせて考え、さらに小学校の3つの資質能力（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力）へのつながりにも結びつけて、学びの連続性について共通理解を図る</li> </ul>	
<p>第4回 8月上旬</p>	<p>&lt;今年度のスタートカリキュラムの振り返り&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校側から今年度実施したスタートカリキュラムの成果と課題の報告</li> </ul> <p>&lt;先進事例からスタートカリキュラムの在り方を考える&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第一著者が幼保小合同で作成した入学式後の第1週のカリキュラム（週案時間割）を紹介し、小学校生活のはじめの第一歩をどう作るか、その視点を共有</li> <li>・ 第三著者からカリキュラムを考える視点のまとめ</li> <li>・ 現在のスタートカリキュラム改善・見直し（行事や読み聞かせの時間設定など）、前提の改善・見直し（活動時間・業間外遊び・テーマ設定）</li> </ul>	<p>（幼）4名 （小）5名 （大学）1名</p>
<p>第5回 8月末</p>	<p>&lt;幼稚園から「入学式翌日の日案と環境構成」の提案&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「久しぶりの集団生活 新しい先生・友達との出会いを良いものに」というテーマ（ねらい）を具現化した「1日の活動の流れ」「教室の椅子の設定」「教師の関わり方」などを提案</li> </ul> <p>&lt;入学式後の最初の二日間を作る&gt;</p> <p>○小学校の週テーマ（ねらい）を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目的の確認：小学校のスタートに適した活動や環境構成を考えるため</li> <li>・ 子供の心が安心・安定してスタートできるようにするための週テーマの設定</li> <li>・ 以下の3つのテーマを週ごとに設定 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 先生や友達に親しみをもって関わろう</li> <li>② もっと学校のことを知ろう</li> </ul> </li> </ul>	<p>（幼）4名 （小）6名 （大学）1名</p>

	<p>③ 生活の流れを知り自分からしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ このテーマをもとに小学校側でスタートカリキュラムを作成することを確認</li> </ul>	
--	---	--

## 2 取組みの実際

ここでは、本プロジェクトの特徴的な取組みである「気になる」子供についての情報交換について詳述する。この取組みの背景には、「2 研究対象学校園の特徴」で述べた「小学校生活に適応しづらい子供」の存在が関係している。前述したように、幼小では子供観、教育観が異なっているため、「気になる」と思う子供についてもズレがあると考えられる。石倉・仲村(2011)は、保育者と小学校教員の「気になる」子供に対する気付きの違いに関する質問紙調査の結果、保育者は子供の「対人関係」に優先的に気付きやすい一方、小学校教員は集団への順応性である「状況適応」への気付きが優先される傾向にあると述べている。

こうした気付きの違いが指摘されているが、入学後に顕在化した「気になる」子供について幼稚園や保育園に問い合わせをしていない小学校が多いと指摘されている(石倉・仲村, 2011)。また、石倉・仲村(2011)は、相互の視点のズレを統合するための情報伝達のツールを開発する必要性を指摘しているが、対象校の現状では、入学前後の子供に関するアセスメントツールは活用されていない。そこで、子供の適応に注目し、幼稚園教員と小学校教員との間で認識のズレがあるかを確かめるために、図1に示した「スクリーニングシート」を使ってアセスメントを実施した。このスクリーニングシートは「石隈・田村式援助チームシート」(石隈, 1999)を援用し、幼児向けに以下の4つの視点で子供を見取ることにした。

- ・ 知的能力・学習面：遊び学習への意欲、言葉数量の理解や表現、運動での意図的な身体操作

小学校就学に向けて気になっていた子ども

( )組 担任( )

なぜ気になっていたのか該当する項目に○をつける(複数可) 必要があれば該当項目欄に文書記述で追記を

No.	名前	知的能力・学習面	心理・社会面	健康面	生活面・進路面	就学措置
		(知能) (遊び・学習への意欲) (言葉・数量の理解や表現) (運動での意図的な身体操作) など	(情緒の安定) (人間関係) (ストレス対処) など	(健康状況) (身体面での訴え) (視覚や聴覚の問題) など	(身辺自立) (苦手なこと) (家庭環境) など	
1						通常・特支
2						通常・特支
3						通常・特支
4						通常・特支

図1 幼稚園側の「気になる」子供のスクリーニングシート



- ・ 心理・社会面：情緒の安定，人間関係，ストレス対処
- ・ 健康面：健康状況，身体面での訴え，視覚や聴覚の問題
- ・ 生活面・進路面：身辺自立，苦手なこと，家庭環境

小学校の学級担任は，幼稚園が作成した各クラスにいる卒園生のリストを基に，スクリーニングシートの4点について「気になる」と思う子供を抽出した。一方，幼稚園の卒園児の学級担任は，入学前の子供の様子を思い出し，「気になる」と思った子供を抽出した。アセスメントに当たっては，教員の日々の多忙さを考慮し，上記4つの視点の中で気になるところに「○」を付け，可能であれば気になる点を一言添える程度にした。

アセスメントの結果，各園・学校から挙げられた子供の人数を表2にまとめた。表2を見ると，幼稚園で「気になる」とされていた子供は小学校で「気になる」とされている子供の2～3倍いた。しかし，その一致率は平均すると約20%と低く，小学校で「気になる」とされた子供について，幼稚園では気にならなかった場合もあった。

この結果から，幼小では，「気になる」と感じる子供についてズレが生じていると考えられる。先行研究では，友達とのトラブルを経験することについて，幼稚園教員は高い必要性を認識していたが，小学校教員は必要性の認識が比較的低く，英会話の学習や平仮名の書き方の指導といった教科の側面が強い指導内容を保育者より重視する傾向にあることが報告されている(白神・周東・吉澤・角谷，2017)。このように幼稚園教員は，集団より個や小集団での遊びや他者との関わり方を注視していると考えられることから，「気になる」と感じる子供も多くなる一方，小学校教員が「気になる」と思う子供は，集団での学習の中で相対的に浮かび上がってくる子供になってくるのではないだろうか。そのため，幼稚園と比較して挙げられた子供の人数が少なかったと考えられる。

このように，「気になる」子供は，周囲の環境が変化することで相互作用的に現れてくるのであり，問題の原因を安易に子供の資質・能力に帰属させることは適切ではないだろう。今回，こうしたアセスメント結果を幼小教員で共有したことによって，互いの子供観の違いが可視化され，共通理解が促進されたのではないかと考える。

表2 園児・児童のアセスメント結果

	知的能力・学習面	心理・社会面	健康面	生活面・進路面
幼稚園	13	16	3	7
小学校	5	6	1	3
一致(%)	3 (20%)	4 (22%)	1 (33%)	1 (11%)

※一致率(%)は，「気になる」と挙げられた園児児童が一致した件数を，挙げられた園児児童の合計数から一致数を引いた数で割って算出

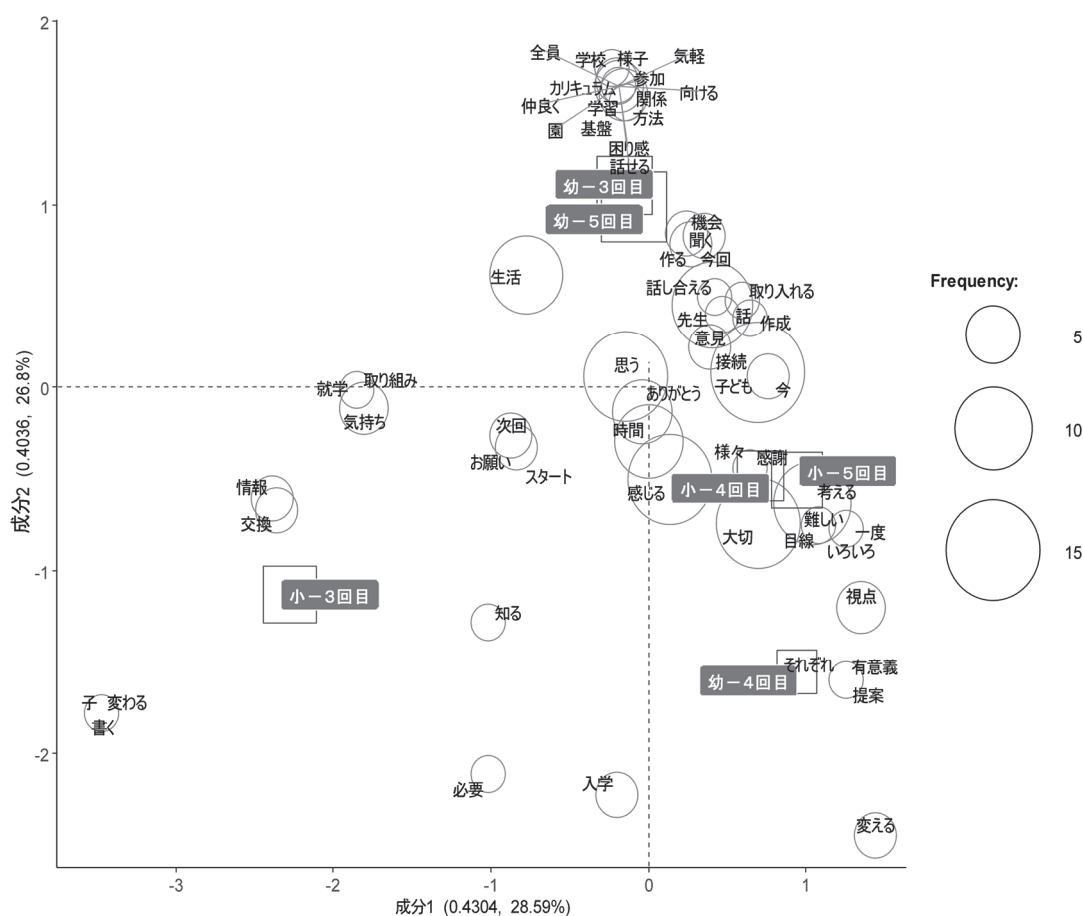


図2 「校種－話し合いの回」を外部変数とする対応分析

### Ⅲ 結果と考察

第3～5回の話し合い後に、参加者に話し合いの振返りを自由記述で求め、Google フォームで収集した。振返りの視点として、「異校種の先生方の意見を聞いて大切だと思ったこと、新たに気付いたことがあれば書いてください」と提示した。そこで得られたテキスト情報に対して、まず、計量テキスト分析を行い、記述内容の特徴を把握することにした。分析には KHCoder(樋口, 2004)を使用した。なお、参加者には予め研究の趣旨を説明し、同意を得た上で調査を実施した。

3回とも幼稚園教員2名、小学校教員3名から回答が得られた。振返りの記述を KHCoder に読み込み、最終的に248語を分析に用いた。その際、「幼稚園」「小学校」などのどの回の振返りにも記述されていた「一般的過ぎる語」は、本来であれば関係ない語同士の関連を導出する可能性があるため(樋口・中村・周, 2022)、分析に用いないように設定し、「困り感」の語は複合語として抽出できるように設定した。次に、校種(幼稚園と小学校)と話し合いの回(3～5回)



の組合せを外部変数として対応分析を行った(図2)。結果の表示に際して、頻出語の最小出現数は2回に設定した。頻出語の出現回数は円の大きさで表され、円が大きくなるほど頻出回数が多かった語であることを意味する。図2を基に、幼稚園教員、小学校教員のそれぞれの振返りの記述の変化について考察する。

## 1 幼稚園教員

まず、幼稚園教員の変化を見てみると、第3・5回の振返りで「カリキュラム」「学校」「様子」「学習」「参加」「困り感」「基盤」などの学校生活に関する特徴的な語と「仲良く」「気軽」「話せる」などの校種間連携に関する特徴的な語が原点の上方に布置され、第4回で「変える」「それぞれ」「有意義」「提案」といった特徴的な語が原点の右下に布置された。

第3回では、「気になる」子供の情報交換を通して、以下の記述が表しているように幼稚園と小学校の生活の変化について気づきを深めていた。

「就学してからと、今までの園生活との間で一気にステップアップしている中で、学校生活に慣れるために遊びの時間を授業カリキュラムに取り入れていただけているが、それでも、つまりいてしまう子供がいる(特に学習面で)ことに改めて気付かされた。」(以下の振返りの記述でも同様に、各回に特徴的な語は太字、下線で標記した)

また、以下のように校種間連携をポジティブに捉える記述も確認され、幼小教員の相互理解が促進されたことが伺える。これらの振返りから、「気になる」子供の意見交流を通して、幼小教員の相互理解が進んだと考えられる。

「<前略>今回、幼稚園の取り組みや、小学校での生活を話し合えたことで、まず先生方と交流ができた方がメリットだと思いました。一年生の先生と仲良くなって、いろんな情報を気軽に交わせる関係づくりにもつながる大切なポイントであると考えするため、一年生全員の先生が揃って参加してくれて本当に良かったです。<後略>」

また、第4回の振返りには、以下のような記述があり、本プロジェクトでの話し合いを通して、小学校側の子供への配慮や指導への思いを知ることができ、有意義だと感じていることがわかる。

「小学校、幼稚園でそれぞれ大切にしていること、先生方が考えてくださっていることなど様々なことが共有でき、有意義な時間になっています。何かを変えようとするときはやり方を変えることも大切だし、そのものの前提、価値観を変えることが必要なときもあるということが胸に刺さりました。」

一方、第5回の振返りでは、以下の記述があり、小学校側との指導観・教育観のズレを改めて感じたことがわかる。

「ゆるやかスタートができるようカリキュラムを考えてくださっていると様々な面で感じではいますが、やはり、学習が基盤となっているため、2日目から学習を意識して始まっていることを改めて感じました。」

「小学校と幼稚園の向いている方向が異なっていることが、今回の意見交換

会で表に出てきたように感じた。」

しかしながら、「小学校と幼稚園の向いている方向が異なっている」と記述していた教員はズレがあるから幼小の接続は難しいで終わるのでなく、

「＜前略＞そこも理解した上で、学習に向かう準備（鉛筆の持ち方、筆箱の置き方、移動の方法など）などは、ルールからではなく、子供たちが取り組んでいく中で困り感を感じたり、やりやすい方法を見つけたりできるような時間と働きかけがあると、自分たちで学校の生活を作っていく気持ちが育つのではないか？また約束をしないと次ができないということが減り、子供の興味や関心にあったカリキュラムの作成につながるのではないか。＜後略＞」

と、子供の資質能力を伸ばすのにはどうあれば良いのかをさらに考え、それを実際に意見交換の中で提案する姿も生まれてきた。さらに、

「＜前略＞小学校に向けて、スムーズに接続できるよう小学校生活を予測して前倒しをすることはできませんが、これからの基盤となるおもしろい！やってみよう！というわくわくする気持ちをもっていろんなことに挑戦できる、しようとする子どもたちを育てていきたいと思います。」

と、安易に小学校生活に必要な知識・スキルを先取りして学ばせるようなことをするのではなく、幼稚園の教育活動を通して、子供の学びの基盤となる好奇心や主体性を育ていこうとする意欲を向上させていた。これらの結果から、幼稚園教員は、プロジェクトの話合いを通して、小学校教育への理解を深める一方、幼稚園教育の意義や役割を再確認することができたと考えられる。

## 2 小学校教員

次に、小学校教員の変化について見てみると、第3回の振返りで「書く」「子」「変わる」などの「幼稚園での遊びを通しての学び」（幼稚園側からのプレゼン説明）の感想に関わる語が原点の左下に布置され、第4・5回の振返りで「視点」「難しい」「考える」「目線」「一度」「大切」「有意義」「提案」などの子供の視点・目線で考えることの大切さや難しさ、「いろいろ」「様々」「感謝」といった校種間連携に関する特徴的な語が原点の右下に布置された。

3回目の話合いを通して、以下のような記述が確認され、幼稚園で行う「遊び」を通しての学びや教師の関わりも含めた環境設定の意味に気付き、子供の主体性や意欲を大切に行う教育活動が印象に残ったことを伺い知ることができる。

「幼稚園での生活から小学校の生活に変わることで、不安が高まる子はもちろんいるが、頑張りに変わる子もいることがよくわかった。幼稚園での気になる児童をきちんと把握しておくことで、小学校のスタートで教師側が細やかな支援ができるのではないかと思った。＜後略＞」

「幼稚園では、ひらがなを教えるというような時間はとっておらず、園児が書きたい！伝えたい！という意欲を引き出すような取り組みや声掛けを

たくさんされていることを初めて知りました。」

また、第4回の「保幼小合同で行なったカリキュラム作成先進事例」並びに「幼稚園側が考えた入学式翌日の日案と環境構成」を聞いた話し合い後には、以下のような記述が確認され、子供の思いや興味関心を大切にしたいカリキュラム作成の大切さに改めて立ち返ることができている。

「こうでなければいけない！という固定概念を取り払って、子供目線で考えていくことの大切さを改めて感じました。」

「どれだけ子供たちが嫌にならずに小学校生活をスタートすることができるか、今一度考える事の楽しさを感じる事ができました。」

「幼稚園、小学校、それぞれが大切にしていることや、提案を、遠慮なく話し合える機会をもてるのは、とても有り難いと思いました。＜中略＞また次回もよろしくお願いします。来年度、有意義に使える時間割を作っていきましょう。」

さらに、第5回の「入学後の週のテーマを考える」では、以下のように、校種の違いを意識しつつも、相互の人間関係が構築されたと感じ、校種の違いを乗り越えていこうとする意欲の高まりが感じられる記述も確認された。

「＜前略＞幼稚園の先生とこんなに密に話をしていくことがなかったので、とても新鮮でした。いろいろな視点で子どもたちの成長を考えていくことは大切だなあと改めて感じました。」

「＜前略＞小学校側が大切にしていること、幼稚園側が大切にしていることの両方を取り入れて作成していくのは難しい場面もありましたが、お互いの校種のことを知り、どうすれば子どもにとってよりよいものになるのかを考えることに意味があると感じました。」

また、教育活動の推進について、以下のような記述があり、ここでも子供側に立つことの大切さを重ねて感じていることがわかる。

「今まであるものを当たり前に進めて行くのではなく、一度立ち止まって子供のためなのか考えることの大切さを感じました。」

「先生がやりやすいからではなく、子供の視点にたって物事を考える姿勢が大切なのだと思います。＜後略＞」

小学校では、学ばなければいけない学習内容としなければいけない学校行事などの多さによって切迫感を抱き、コンテンツベースの教育活動になりがちな現実がある。しかし、振返りの自由記述からは、それを当たり前とせず、改めて子供の興味関心を大切にしたい主体的な学習活動を目指したいと思う教師の意欲の高まりが感じられる。

これらの結果から、本プロジェクトにより、互いの子供観・教育観を理解し、さらにそれをどう取り入れたら良いか考えを伝え合い、双方の意見を聞き合おうとする姿勢が生まれてきたのではないかと考える。特に、「有意義」「提案」といった語は、幼稚園の4回目、小学校の4・5回目の振返りの特徴語として双方で確認された。もちろん、振返りには、校種間接続の「難しさ」が確認されたが、その難しさを乗り越えていこうとする意欲の向上も確認されている。

つまり、本プロジェクトによって教育の本質を巡って互いが歩み寄ることができたと言えるのではないだろうか。

#### Ⅳ 研究の成果と課題

本研究の目的は、小学校のスタートカリキュラムの共同編成プロジェクトを通して、①幼児教育と小学校教育の異なる点や共通点を相互理解すること、②それによって子供が学びを深めていく環境構成の充実を図ることができるようになること、③その結果、子供のより良い適応状況をつくることであった。そのためにもまず子供たちの適応に関する実態調査を行い、それを基にプロジェクト会議を行なって検討を重ねた。会議後にはアンケート調査を実施し、互いの意見や思いを把握した。以下、目的の三つの視点ごとに成果と課題を考える。

まず、幼小の相互理解について、振り返りの自由記述を確認すると、小学校側から子供の目線で考える、意欲を引き出すということに注目する感想が多く記述されていた。幼稚園側も、小学校の学習内容、教えないといけないことの多さなど、幼稚園との違いに気付くことができていた。こうした相手校種の特徴への言及が確認されたことから、相互理解が進んだのではないかと考える。

次に、子供が学びを深めていく環境の充実を図ることについては、5回目の話し合いで小学校入学後3週間の週テーマが設定されたことから、今後、環境の充実が図られると考える。本プロジェクトを通して得られた様々な気づきがすぐに子供の環境の改善に役立つかはわからない。しかし、幼稚園教員が小学校の実態を知ったこと、互いの認識のズレを確認し支援の在り方を考え直したこと、また、小学校教員が、子供の側に立って学習環境を充実していこうとする意欲を高めたことが、振り返りの記述内容から確認できた。こうした気づきの変化は今後の教育活動に影響を与えられと考える。

最後に、子供たちのより良い適応状況を作るためにスクリーニングシートによるアセスメントを実施した。その結果、双方の子供観や教育観に関するズレを認識することができた。そして、本プロジェクトの第2回で実施した情報交換会において、四つの視点をもとに焦点を絞って情報交換を行うことができ、子供理解の深化と今後の支援方針の策定することができた。これらのことより、子供たちのより良い適応状況を作り出すための教員の意識が以前より向上したと考えられる。

先行研究においても、幼稚園・小学校教員で教育観や子供をみる視点にまで踏み込んで相互理解を図る研究・実践はほとんど報告されていないと指摘されている(谷口・椋木、2023)。谷口・椋木(2023)は、幼稚園と小学校、相互の教育観を共通理解するために、双方の教諭が幼児期の子供の様子を映像で見え話し合う研修の成果と課題を報告している。その結果、この研修が教育観や子供をみる視点について相互理解を図る上で有効だったと述べている。しかし、この研修はあくまで映像資料に関する意見交流であり、目の前の子供の現状や課題について共有しているわけではない。また、こうした研修の準備の効率性や研修で扱う内容の困難さも課題として挙げられていて、汎用性に課題が残ると



述べられている。

一方、本プロジェクトは、幼稚園・小学校教員が実態把握を基に、目の前の子供について直接話し合いを重ねることで、小学校のカリキュラム作成や幼小の先生方の相互理解を促進することができた。濱田・松井・八島・山崎(2019)は、幼保小連携・接続の意義として、①人的環境に対するなじみによる安心感、②保育者・小学校教諭の関係性構築、③保育者・小学校教諭の保育・教育の省察と子供理解の深化の契機、④子供の育ちのつながりに対する意識、の4点を指摘している。A自治体では、①について、既に、幼小双方の教員による読み聞かせが行われていた。加えて、本プロジェクトの振返りの記述から、幼小双方の教員に上記の②・③・④に関する気づきが確認されたことから、幼小連携として本プロジェクトは有効だったと考える。

このプロジェクトの課題として、保育園からの参加がなかったことと小学校側の学習内容、学校行事の多さが挙げられる。地域の公立幼稚園と公立小学校は同じ自治体の管轄下にあるため、行政的な連携や調整が比較的図りやすい。また、幼稚園・小学校は文部科学省の管轄であるため、各校種で育成する資質・能力の接続がイメージしやすくなっている。一方、保育園は地域に複数あり、各園の日程を調整する難しさがある。また、幼児教育施設の教育は多様であるため、施設類型の違いを越えた共通性が見えにくく、スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、幼保小の理念が共通していないといった課題が指摘されている(中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会, 2023)。このような課題を一公立幼稚園・小学校で解決することは現実的ではないだろう。今後、教育行政の力を借りつつ、保育園も含めた地域の幼児教育施設全体と小学校との架け橋プログラムを推進できる連携体制を構築する必要がある。

次に、小学校側の学習内容、学校行事の多さについて、本プロジェクトの過程で小学校の先生方から聞こえた話からも、その現状が垣間見られた。この状況から生まれてくるコンテンツベースの教育は、小学校カリキュラムの固さとして小学校教員の意識に根付いてしまい、幼稚園教育のように子供の発想を大切にするという教育活動の展開は受け入れが難しいという意識につながっている可能性がある。

この問題を根本的に解決するためには、カリキュラム・オーバーロードを改善し、コンピテンシーベースでカリキュラムを構想できる時間的なゆとりを設ける必要がある。カリキュラム・オーバーロードは、カリキュラムにおいて、学校や教師、児童生徒に過大な負担がかかっている状態として理解され、世界各国のカリキュラムが同様の課題を抱えていると指摘されている(白井, 2020)。もちろん、日本も例外ではなく、文部科学省(2024)は、学習指導要領改訂の方向性を示す「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会の論点整理」において、カリキュラム・オーバーロードに言及し、教育課程の実施に伴う過度な負担感が生じにくい仕組みを検討すべきであると述べている。

しかし、その実現を待つことは現実的な対応ではない。こうした双方の教育観の違いを埋めるためには、本プロジェクトで実施したような丁寧な話合いの時間を確保する必要があるだろう。本プロジェクトを通して、打合せ時間の確保ですら困難であることが実感されたが、架け橋プログラムの充実は、子供の校種間移動に伴う適応の問題に直結する重要課題であるため、優先順位を上げて対応していく必要がある。

今後の展開として、今回のプロジェクトチームで共同作成した週テーマ（ねらい）を活用し、それに沿ったカリキュラム構成を行うことが有効ではないかと考える。小学校教員の第5回目の振り返りでは以下の記述が確認されている。

「小学校も1週間ごとのテーマを決めて、それに合わせた単元を盛り込んだ週案をしっかりと練っていくべきだなと思いました。〈後略〉」

週テーマ自体に目指す子供の姿が記述されているため、子供の姿をイメージして週案を作成することになる。このテーマに沿って日々の授業を構成することが、コンピテンシーベースのカリキュラムへの移行につながっていくと考える。できる改善から少しずつでも着手できるよう、今後も架け橋プログラムの評価・改善サイクルを回していく必要がある。

#### 参考・引用文献

- 濱田 祥子・松井 剛太・八島 美菜子・山崎 晃(2019). 幼保小接続カリキュラムの意義と課題-保育者と小学校教諭に対するインタビューから- 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 5, 24-33.
- 樋口 耕一(2004). テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, 19(1), 101-115.
- 樋口 耕一・中村 康則・周 景龍(2022). 動かして学ぶ!はじめてのテキストマインニング: フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析, ナカニシヤ出版.
- 石隈 利紀(1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス, 誠心書房.
- 文部科学省(2010). 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」, [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf). (最終閲覧日: 2024年9月29日)
- 文部科学省(2022). 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版) [https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/20230224-mxt\\_youji-000027800\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/20230224-mxt_youji-000027800_2.pdf) (最終閲覧日: 2024年9月29日)
- 文部科学省(2024). 今後の教育課程, 学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会論点整理 [https://www.mext.go.jp/content/20240925-mxt\\_kyoiku01-000038070.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240925-mxt_kyoiku01-000038070.pdf). (最終閲覧日: 2024年9月29日)
- 中川 智之・西山 修・高橋 敏之(2011). 保育者と小学校教諭における学級経営観, 子どもの捉え方, 及び規範意識の育ちに関する認知の関係 学校教育研

- 究, 26, 112-124.
- 仲村 慎二郎・石倉 健二(2011). 「気になる子ども」についての保育者と小学校教員による気づきの相違と引き継ぎに関する研究 兵庫教育大学研究紀要, 39, 67-76.
- 大対 香奈子・梅本 美南(2017). 就学時の環境変化についての直接観察によるアセスメント 近畿大学心理臨床・教育相談センター紀要, 2, 1-13.
- 白神 敬介・周東 和好・吉澤 千夏・角谷 詩織(2017). 幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違 上越教育大学研究紀要 37(1), 49-55.
- 白井 俊(2020). OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム ミネルヴァ書房.
- 谷口 夢歩・椋木 香子(2023). 幼小連携における教師の相互理解を促す研修プログラムの開発, 宮崎大学教育学部紀要 100, 142-157.
- 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会中央教育審議会 初等中等教育分科(2023). 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～. [https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_youji-000028085\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_youji-000028085_2.pdf)(最終閲覧日:2024年9月29日)

---

Bridging the Gap: Outcomes and Challenges of a Collaborative Start Curriculum for Seamless Transition to Elementary School

OKURA Hisashi \*1, MATSUI Noriko \*1, IZUMI Tsuguyuki \*2

(Abstracts) In this practice, a joint curriculum development project was launched to ease the transition for children in the “bridge period” from age five to first grade, involving five discussions between kindergarten and elementary school teachers. Participants reflected on these discussions, and the content was analyzed. (1) A screening sheet to identify children who “cause concern” helped clarify differences in observations, leading to a shared understanding of child perceptions. (2) Teachers recognized differences in their views of children and education, improving their attitudes toward compromise and increasing awareness of the need to smooth the transition. However, an overloaded elementary school curriculum was noted, limiting the flexible application of the start curriculum and hindering child-centered education.

Keywords : Bridge Program, Start Curriculum, Screening Sheet, Curriculum Overload



\*1 Hayashima Kindergarten

\*2 Faculty of Education, Okayama University

---

